

久納会計 FAX ニュース

令和6年2月2日



2024年2月号 今年はどうなる

Kunoh Accounting Office

久納公認会計士事務所

震災と航空機事故で幕を開けた令和6年もはや一ヶ月を過ぎました。かなり遅くなりましたが、今回のテーマは例年通り、干支から考える今年の予想です。ちなみに今年の干支は甲辰（きのえ・たつ）です。

「甲（きのえ）」の意味

まず「甲」ですが、十干の最初の年になります。「甲」は草木の種を覆っている固い殻が、割れだす「かいわれ」状態を表すというのが一般的な解釈です。転じて甲冑（かっちゅう）・甲殻（こうかく）・鱗甲（りんこう）と使われ、いずれも固い状態を示します。草木の種の表皮が割れ、芽を伸ばしだす姿から「はじめ」、「はじまり」とも読まれています。

「甲」が種を覆っている固い殻を指す意味から、「甲」は実体を封じ込める意味、外見からは中身を絶対に識別させない意味を持ちます。機が熟した新たな生命が姿を現すまでの過程を、漢字「甲」を用いて表したものと考えられます。ただ、新たな生命がいいものか、悪いものかの判断は出来ません。十干で一回りする前の十年とは全く異なる時代に入ったということを「甲」の漢字を使い、表したとみられます。

次に辰（たつ）ですが、音は「しん」です。「辰」の甲骨文、金文では、蜃（シン・おおはまぐり）の象形文字で、二枚貝の大蛤（おおはまぐり）が口を開けて足を出し、それがひらひら動いている形といわれています。「辰」は漢字索引の部首であり、単独では意味を持たない多元文字です。だから、安岡正篤先生も「辰は校注余多（あまた）であ

る」と述べられています。漢字語源辞典でも、「辰」にまつわる説文は無く、捉えどころが難しい文字のようです。しかし、「辰」を含んだ漢字は多く、震、振、唇、農などがあります。この漢字を見ると、何らかの動きのある年と予想されます。

昨年のふりかえり

昨年のFAXニュースで2023年は「荒れる展開」と予想しました。日本国内では、急激な円安はありましたが、日銀も植田新総裁が従来路線を継承したため、大きな波乱はなく、株価は大きく上昇しました。

世界的な大事件はイスラエルとハマスの戦闘でしょう。世界はウクライナとガザの二つの紛争地域を抱えることになりました。

株価は大きく上昇しました。日経平均の年間上げ幅は7,369円と1989年（8,756円高）以来の大きさとなりました。アメリカでも、ニューヨーク（NY）ダウ平均株価が14%上昇、ナスダック総合指数が43%上昇と、大きく上がりました。

60年前・120年前の出来事

60年前の出来事として、一番は東京オリンピックでしょう。これに合わせて東海道新幹線も開業しました。1970年の大阪万博と共に日本の戦後からの復興・高度成長のシンボリックな出来事だと思います。オリンピックの開催はアジアでは初となるものでした。新幹線も当時は世界最速の鉄道でした。

それ以外としては、池田勇人首相から佐藤栄作首相への政権交代、6月に新潟地震が起きています。

世界でも、当時のソ連でフルシチョフ書記長からブレジネフ書記長への政権交代が起きています。

120年前の2月に日露戦争が始まりました。日本海海戦は翌年になりますが、ほぼこの年は日露戦争一色です。

今年はどうか

さて今年ですが、「甲」の年に当たるので、何か新しいことが始まるのでしょうか。日本の政界では、政治資金の裏金問題から自民党の派閥の解体に進んでいます。これが今後の政治にどのような影響を与えていくのでしょうか。はたして自民党あるいは政界全体の再編など、あるのでしょうか。

経済の面では、中国の不景気の影響と、人手不足、金利の上昇が気になります。昨年から中国向けの輸出が大きく影響を受けているように感じます。統計的にはまだ、明らかになっていませんが、中国の景気はかなり悪いと思われれます。中国向け工作機械の輸出も止まっているようです。新聞やネットでも、中国景気の悪さに言及する記事も増えてきたように感じます。

人手不足は全産業に及んでいます。大企業でも若手の退職が止まらず、人手不足という話を聞きます。現状の円安水準では、海外からの研修生も以前ほど入ってきません。

世界的に見ると、今年は大変な「選挙イヤー」です。最初の台湾は現政権が大統領選挙には勝ちましたが、議会では過半数を維持できず、今後の政治運営は難しいものになるでしょう。

なんといっても影響が大きいのは今年11月のアメリカ大統領選です。このままの勢いではトランプ前大統領が返り咲きそうですが、そうすると全世界の混乱は必至です。

日本の金利は緩やかに上昇しそうです。植田日銀総裁は、ゼロ金利政策からの脱却の地ならしを着実に進めているように見受けられ

ます。

証券市場の方ですが、「辰巳天井」との相場格言がよく知られる通り、天井を形成しやすい年廻りとされています。「辰年」の日経平均株価は4勝2敗と平均的な勝率にとどまりますが、平均上昇率はプラス28%と十二支中トップです。2倍超の急伸をした1952年の影響が大きいとはいえ、4勝全てが2ケタ上昇を記録しています。翌年巳年の平均13%高を含め、堅調な足取りといえる一方、「辰巳」で明確な大天井を形成したケースは1989年のみ。これに続く2-3年（午未申）は平均的には方向感が乏しくなる印象のようです。

十干の「甲」（きのえ・西暦末尾4の年）の年は、過去4勝3敗、平均上昇率プラス4%弱とやや冴えない成績です。

とはいえ、「甲」も「辰」も、過去は株価が上昇した年が多いようです。今年も年初から株価上昇が続いていますが、アメリカ・ヨーロッパの金利が低下となるとさらに上昇が続くのでしょうか。また、日本においては、新NISAによる、証券市場への資金流入がどれくらいあるのが、一つの関心事です。

今年の当事務所の取り組み

当事務所では、これまでと同様、みなさまのお役に立つよう努めて参ります。

みなさまにとっても、良い年となりますことをお祈りしております。また、お知り合いの方で税理士にお困りの方がいらっしゃいましたら、是非ご紹介下さい。しっかりと対応させていただきます。

（以上）

参考文献

安岡正篤著『干支の活学』（プレジデント社刊）
干支歳時記（越玄さんのホームページ）
各種年表、コスモ証券のホームページ、ウィキペディアなど